村山民俗学会

第 404 号
発 行 日　2025 年 6 月 1 日
発行責任者　相原　一士
編 集 担 当　岩鼻 通明

三島通りから旅籠町までの幼きころの風景　その２

市村 幸夫

（３） 万日寺と遊女と身投げ井戸

万日寺とは念仏寺万日堂のことで、旅篭町大通りの東側に、六日町極楽寺の末寺として建立され、慶安四年（一六五一）に常念仏が開眼されたといわれる。最上氏改易の後に入部した鳥居氏は、馬見ヶ崎川の流れを北東寄りに変えた。その空閑地に寺地を賜ったことを起源としている。万日寺は檀家を持たない無縁寺であったが、いつしか多くの人から慕われる寺となっていった。境内は東西が七十間三尺、南北五十六間五尺で、弁天池と観音堂があった。万日寺の跡地は旧馬見ヶ崎川の河原とともに国重要文化財文翔館となっている。

文政二年（一八一九）閏四月、七日町から出た火は、南風が激しく翌日まで燃え続けた。寺院が九ヶ寺、町家八百軒、陣屋会所五棟焼失という大火災であったが、万日寺のみ焼けなかったことから、いっそう人々は念仏の信心に傾いていったのである。

旅篭町は旗本や大名が泊まる本陣宿と遊女もいる二面性をもつ宿場町でもあった。万日寺の付近には高砂屋、三井屋、八木屋など華やかないろをもつ料理茶屋があった。高砂屋の隣で暮らしていた私の家は、大工の傍ら果物や遊女たちの使う小間物を商っていたらしく、祖母は子供の頃、早くあのような美しい着物を着てみたいものだと思ったそうだ。遊女たちの哀しい生い立ちなど知るよしもなく、高砂屋の賑やかさが憧れであったようである。

茶屋で暮らす彼女たちにどのような未来があったものか。同じ旅篭町内であり万日寺は彼女らの心のより所であり、いつも手をあわせていたに違いない。六日町の天然寺と万日寺の本寺極楽寺に彼女たちの墓があると聞いていたが、無縁墓となり移転されたものか、いまその痕跡を探すことはできない。どのような戒名がつけられていたのであろうか。町のひとびとが懸命に弔ったであろうことは想像に難くない。

旅篭町に生まれ育ち、井出一太郎や木俣修を師と仰いだ市井の歌人森谷善次郎は歌集「十念集」で、万日寺と遊女のことをつぎのように詠んでいる。

身を投ぐる今はを遊女が念仏にすがりし寺井戸か石組みをたもつ
無縁寺の井戸に身を投げし傾城の哀れは古文書の上のみならず
小さなる祠も陽根も石に彫り人はひそけく祷りに生きき

湯殿山神社とともに県会議事堂はわれわれ子供の大切な遊び場であった。県会議事堂